

技術科部会

内田 康彦

悩んでいる先生こそが、未来をつくる

はじめに

東京民研技術科部会は部員の数が少なく、独自に部会を持つことが難しい状態です。新しい人が入ることで、何とか確立していきたいと思っています。

技術科の教員同士での研究としては、先日の東京教研で「立体パズル」の実践が報告されました。領域的には木材を利用した「材料と加工」の分野ですが、情報制御、プログラミングへの発展する実践が報告され、「ものづくり」をさらに広い視点から見直すことが出来ました。

技術科という特異な教科

中学校技術科は1958年の学習指導要領に登場し、1977年の変更で一部男女共修になり、1989年で男女完全共修になりました。今の形になってから30年程度ということになります。世界的

に見ても、男女共修の必修教科として普通教育に取り入れられている国は日本と韓国だけです。

技術科という教科は、歴史の流れを縦軸にとり、現在の世界を横軸にとったとき、縦軸・横軸共に広がりや浅く、教材・教具について未成熟です。学習指導要領の変化も大きく基本軸不安定で、子どもに真に学ばせたいことを誰も手にしていないと思えます。若い先生はおろか、もうすでに定年を過ぎた私たちも同じです。

一人配置を乗り越えて

各校一人の配置は、授業の悩み相談が出来ない状況を生みます。「自分の未熟さか？」と悩んでも、「何をどう変えるか？」という課題や解決法が見つからず、一人で悩んでいる先生も多いかも知れません。使用教材、学習方法が十分研究し尽くされていない教科であることを

考えれば必然であり、逆に、悩んでいる先生の真摯な姿、真剣な様子が、際だって見えてきます。これからの技術教育を作る力、やりがいはこちらにあると考えます。

「交流」が「力」をつくる

先生方を悩ませる要因に、子どもの生活力の低下や生活関連施設のブラックボックス化があります。機械化が進み、大工さんの仕事でさえ見たことがない子どもたちも増えていきます。ひもが結ばない、ナイフを使ったことがないなど、生活が便利になったことで子どもたちの生活力が低下しています。技術の進歩が技術の先生を悩ませているという、皮肉な現状もあります。

私は「これでどうです！」という完璧な実践報告でなく、真剣に取り組み、悩んでいる実践こそが、今、求められていると考えます。技術の先生は、一人ひとりの背中に違った教材があり、授業の展開があり、実践があります。ご自分では「当然」な授業の進め方、教材でも、仲間には新鮮な実践となります。

是非、交流し合いましょう。

(共同研究者)